

《7月例会報告》

全面教育学研究の一環としての

## 柳田教育論と庄司認識論

柳田國男の教育観は、学校教育の枠にとらわれない

主体的ともいふべき前代教育の遺産であった

庄司認識論はその柳田の教育観を抜きにしては語れない

全面教育学の全貌が垣間見られた例会でもあった

### 学校が始まる前から教育は立派に成立していた

庄司 和晃

柳田國男は、日本の民俗学を歴史学の中に大きく位置づけた。彼は、明治から大正にかけて、政府の役人として日本各地の人々の生活を見つめていくうちに日本固有の民俗の存在に気づく。そこに人々の知恵を発見し、それが連綿と伝承されて今日至ったことをたとえば「言語芸術」としてくり、教育論というかたちで昇華させていったのである。

全面教育学は当然のことながら「柳田國男の教育」を守備範囲としているのだが、今再びそのコンテンツ（庄司和晃『現代国語教育論集成 柳田國男』1987による以下に掲載）をみると、その教育実験をすべてカバーしているとは言えない。

#### 一 以前の世の国語教育の発見と復原

→人生に役立たせるためのことば教育、特

に就学前の家庭教育の遺産の発見

#### 二 『分類児童語彙』という成果の提出

→日本語が日本人のものになっていく過程を子どもの言葉から発見

#### 三 人生国語教育の基礎過程の明示

→幼な言葉・耳言葉・口遊び・手遊び物・軒遊びの言葉によって生きる基礎を確立

#### 四 「自然に近い国語教育」という本音

→かつては生活の中で自然に生きるための言葉は身に付けられていった

#### 五 『少年と国語』は柳田論の具体版

→戦時中に書かれた本書によって柳田は新しい日本の教育を思い描いていたことが分かる

#### 六 柳田国語科を開示した教科書の完成

→戦後、柳田は教育論を実践すべく国語の教科書を編纂した

#### 七 国語は「世を新たに作る」という大志

→受験のためでなく、多様な教材、豊かな地方性が柳田の意図だったが

#### 八 国語の力を示した「なぞとことわざ」

→「なぞ」と「ことわざ」によって立派に国語の力はついた

#### 九 未来の国語教育を招来するべく

→国語の歴史を意識し、生きるためのことば教育をすすめていく

我々はこれまで「ことわざ」教育を中心に様々な教育実験を行ってきた。しかし、それは仮説をともなった意図的なものが多かった。庄司さんは、ここで思いついたらすぐに提示するくらいの自由さや自然さがあってもいいという。それは前代教育の「自然に近い」国語教育の風景を意識したものではなかっただろうか。

## コトワザ教育集成

庄司 和晃

会の後半は、コトワザ認識論の展開だ。言うまでもなく庄司認識論と柳田教育論は不即不離の関係にある。戦後の成城学園で庄司さんは柳田國男と出会った。理科の教師であった庄司さんには「柳田國男と科学教育」という著作があるが、ここには柳田の自然に対する姿勢が事細かく分析されている。

子どもには造語能力があるということが「虫の命名」から発見されると、なぜそうつけたのかを推理する。柳田は「カタツムリ」などの一部の小動物の呼び名や方言を意識して収集するうちに、地域共同体の強さや隣接する他地域との相互理解の関係も浮かび上がってくるというのだ。



今回の「コトワザ教育集成」の冒頭は、カマキリの創作「呼び名」である。「カマバッタ」とか「サンカクムシ」「カマタテ」などと子どもが称するとき、カマキリをどう見たかの認識が浮かび上がってくる。これは柳田の手法だ。直感の鋭い柳田ではあるが「仮

説」を理解のステップとして設定しながら一歩一歩その認識の実像をとらえていこうとしたと庄司さんは分析している。（「柳田國男の科学教育」）

もちろん庄司認識論は、必ずしも柳田の著作から発生したものではなく、仮説実験授業などの取り組みの成果の中から醸成されたものでもあるといえるが、柳田が常民やその子どもたちの疑問や自然との付き合い方を「名付け」から類推したことをヒントに認識論という鉱脈に邁進していったのではないだろうか。

例会では、創作「呼び名」は、アリアアリジゴクまで紹介され、さらに困ったときのつぶやきとしての創作「呪文」、さらに「好きなコトワザ、嫌いなコトワザ」の教育実験が紹介されていく。実はここには、人生国語教育や自然に近い国語教育のなぞりがあり、柳田が言葉から前代人の心持ちを類推したように、我々も教育実験の対象者に対してその心持ちを押し量る作業を行っていると言える。

無名の前代の人たちの遺産であるコトワザから「比喩」的構造を発見したのは庄司認識論の大きな成果であることはいうまでもないことだが、そのコトワザを三段階連関理論の中に位置づけ、さらに構造化するという試みで深化を果たしたといえるだろう。

比喩は、レトリックの一つとして考えられやすいが、実は認識の段階の一つとしてあるのだと考えると、コトワザに昇華させた前代人の知恵は相当なものであったと再認識させられる。

「猿も木から落ちる」という比喩としてのコトワザは、様々な失敗経験の積み重ねの上に生まれたのだが、認識としては「エライ人も失敗する」というつかみであり、庄司さんの構造化では「人は失敗をする存在だ」という哲学にまで高めている。柳田國男を踏まえつつ、コトワザから学ぶこと

はまだまだあると思えるのである。

## 型はめ創作コトワザ

植垣 一彦

このレポートは「高津看護専門学校」の1年生（20歳くらいの生徒）を対象にしたものである。

「ナース服と化粧は気合いが入る」という入り方で仕事を始め、「器具とテストは落とせない」と無難に進むが、「通風と赤点は痛い」「注射と出産は一瞬の痛み」など自分が見聞きしているものの実際に体験していないものもどんどん出てくる。これらは互いに人の作品を見て実感が出やすいようになっているのではという尾崎さんの指摘があった。看護というのはなんといっても一人では出来ない作業なのだ。

その辺りを植垣さんは、神戸大の「チーム医療」という発想を紹介して例えた。つまり、「チーム医療」という考え方は、医療が様々な人の様々なアプローチによって成り立つという点でチームなのだという。そこで、神戸大では「医療を料理に例えなさい」という問いかける。これがまさにかたはめのひとつの到達点でもあると思えるのだ。

## 歴史性を受け継ごう！とはどういうことか

今沢 正史

今沢さんの冒頭は、次のようにはじまる。「そのことわざでの方針とは「金よりももの」！「肩書きより者」です！」

読み手は、残念ながらここでまず頭を抱える。いきなり「その」という指示語で始

まる文章において「その」は何を受けているのだろうか。次に「金」より「もの」、「肩書き」より「者」という場合に、4つの言葉にはどのような関係性があるのだろうか。

残念ながら今沢さんの文章は論理的でなく読み解きにくい。山瀬まみが出てきたり銭形平次が登場するのだが、それらの相関がはっきりしない。また安易に行をあけるため構造が見えにくく何をねらっているのかが判然としないのである。

庄司理論は認識論でもあり、人間関係論でもある。そのことを踏まえて新たな論の展開を期待したい。

## 授業に比喻を

徳永 忠雄

### 「家族はシャンプーのようだ」

これは私が教える中学3年生が社会科の時間のまとめとして作った比喻・つまり創作コトワザといってもいいだろう。私はこれを読んだときこの子には何かしかりとしたつかみがあるなあ、と感じた。

今まで社会科の時間の最後にワークシートに書かせるまとめには、「感想」→「たとえ」→「一言でいうと」という流れで一行程度の文章を書くようになっていた。それを毎時間書いているうちに物事を例えてみるという発想が備わってきたのではないかと思う。（詳細は年報2011）

子どもがおもちゃでままごとをしたり、擬人化した絵本を読むように「比喻」は世界に充ちている。しかし「1+1」が必ずしも2でないと分かった頃から比喻は一つの武器になると思うようになった。それは例えることで理解（認識）が深まることで

あり、また豊かな表現が出来るからだ。作家村上春樹の文章には良質の比喩がちりばめられているとっていい。さらに比喩は一つの概念化を説明するとき大きな力を発揮する。これは三段階連関理論の「下り」にあたるものだ。比喩を意識させること、この点に私は今腐心している。

---

## 全面研ホームページ準備中

尾崎 光弘

今回、ホームページ担当の尾崎さんから具体的なホームページのコンテンツが出された。

「全面教育学」はその内容の膨大さに比してその知名度がまだ十分に流布していない。すでに25周年集会を一昨年行ったものの次世代への継承が課題の一つとなっている。その意味でもホームページの開設は必須のものという意見が相次いだ次第だ。

未知の人々への発信ということである。未知の行き違いやトラブルも想定されるが、まずは発信だけはしていこうということになった。以下に担当の尾崎さんの提案の一部を紹介したい。

- ・キャッチコピー

「人間ばっかり主義ではスマイレたちがさみしがる」

- ・構成

会報「しんらばんしょう」の掲載

年報の目次掲載

会としての著作一覧

全面研の歴史

庄司先生の講演記録

「全面教育学の現在と未来」（25周年の講演から）

教育実験群の紹介

認識の三段階連関理論の全貌

まだまだありますが、これらを分担して

執筆、順次掲載していく予定です。みなさんご協力を。

---

## ◆武田さん近況

武田さんが主宰しているNPO法人「SSC スモールスクールちんげん」主催の教育セミナーが来たる9月24日・25日に開かれます。

内容は、新しい指導要領の実施に際して教師として必要なことは何か、を問い、ワークショップ等で交流を深めていくというものです。特に若い先生、自分なりの教師像を描こうとしている方々、国語教師でもある武田さんの話を聞いてみてはどうでしょうか。詳細は以下の通りです。

【場所】成城学園本部棟3F大会議室

【募集人員】20名

【費用】10,000円

【内容】講演とワークショップ

「ものの見方・考え方」（武田恭宗）

「教師力を高める」（蛭田正朝）

講演：「教師としての心構え」（川嶋 優）

連絡先：03-3300-9099（武田）

---

## ◆小田さん近況

震災復興支援の前線基地となっている遠野市から150人の子どもたち（4年生）がきて歌声を聞かせてくれるシンポジウムが今月国立劇場小劇場であります。小田さんが事務局をやっています。以下の内容です。ぜひふるってご参加下さい。

日時：9月24日（土）3：30～7：15

場所：国立劇場 小劇場

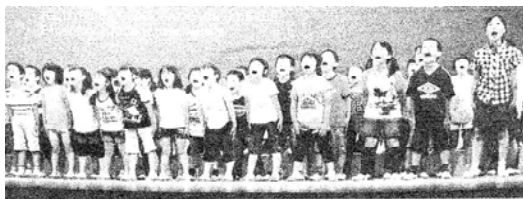
内容：鼎談「文化による復興支援」

（文化庁長官近藤誠一、赤坂憲雄、北川フラム）

「遠野の里の物語」遠野小学校の子どもたち

ちの合唱（小田さん曰く 感動的です！）  
映像報告 & シンポジウム「文化と復興  
支援」現地の学芸員などの討議

内容は、6月12日に遠野市で行われたものを好評に付き東京で再演するものです。詳細は、小田さんのホームページをご覧ください。



## ◆向井さん近況

実は向井さんは7月の例会のためにレジュメを準備されて私のところに送ってくれたんですが、残念ながら例会当日には間に合いませんでした。タイトルは、「三段階図式で解く 無勝手流・三段階連関理論」です。

内容は「三段階連関理論」を教育実験や子どもたちの日常生活など様々な場面に当てはめて応用した斬新な内容です。三段階連関理論は我々の日常の中で無意識に行われているものでもあります。それを意識化するということが向井さんの実験のよって明らかにされます。この意識化がいかに重要か、我々の日常の思考が新たな視点で生かされることでしょうか。なるほどという内容で必読です。

さらに刺激されたのは「aft 60」の刊行です。サブタイトルに「ひじょうきんつうしん」とあります。内容は2009年から今年の3月までに向井さんが書き留めた非常勤通信の合本です。開いてみると多岐にわたるアプローチの見事さ。退職してなお元気な向井さんの面目躍如。このエネルギーに脱帽です。

## ◆本の紹介

### 『柳田国男を歩く』

（江口 司 2009 現代書館）

柳田国男は『遠野物語』を書き始めていた明治41年、九州の旅に出ている。椎葉でみたイノシ狩りの様子をしたためた『後狩詞記』と『遠野物語』を結ぶもの、その辺りがオーバーラップする刺激的な著作。

柳田が椎葉に行ったのは、当時輸出品として重視されたお茶の栽培状況の視察であった。そこで柳田は焼き畑農業を眼にする。村の土地を順繰りに焼いていくこの農業の根源には、土地は村人の共有財産であるという原始共同体（日本的な社会主義）の思想があった。柳田はこれに注目したのだ。これこそが平地人を震撼させるものであった、と本書はいう。なるほどと思わせる一書であった。

\* \* \*

#### 7月例会参加者

庄司 和晃、植垣 一彦、小田 富英、武田 恭宗、今沢 正史、尾崎 光弘、徳永 忠雄

◆会報編集責任者：徳永 忠雄



## 【10月例会のお知らせ】

日時：10月1日（土）

14:00～17:00

場所：お茶の水 喫茶「アミ」

内容：庄司認識論講義

持ち込みレポート

ホームページ進捗状況報告

## 昔からの一大事ともいべき因縁

「言葉」とは一体何か。

このコトバの謎を解こうとして、人間は必死になっている。これが解ければ、人間の真底が見えたといわんばかりの取り組みようだ。

その営みは昔からである。ずっと昔からの一大事ともいべき因縁だ。全く記念碑と称し得る、見事なる題目ある。

言わば、人類の大課題だ。

どう解いたか。

が、いまだに数ある諸説は一致していない。各人各節のありようである。つまり、謎は解け切れていないのだ。

しかし、である。その謎を明かした・言い当てた・探し得た…と表現された、これぞという「言葉」観は、幾つも見つかる。

その姿態は、群盲撫象のごとし、である。とはいえ、なかんづく一致性もやや見えて気を引くものには、たとえば次が存する。

- ・道元 語句は念慮を顕現する。
- ・ヘーゲル 言語というものは言わば思惟の肉体である。
- ・マルクス 言葉は思惟の直接的現実態だ。
- ・フローベール 文章は思惟の肉である。
- ・ハイデッカー 言葉は存在のすみかだ。

いずれも、歴史的なテーゼの一群だ。いわゆる名だたる規定である。比喩的表現もあってなかなかだ。たいしたものである。

ところで、私どもの一般大衆は、どうであったのか。

農民や漁民の人達には、こんな偉そうな言挙げは、出来なかった。しかしこれこそと、目立たぬように、こう言い切った。

「言葉は心の使い」、と。

すんなりとした表明だ。肩肘を張ったところはない。あるのは体験の厚味だけだ。

コトワザによる押し出しである。びたりと、わかりやすく断言したものである。威を張ることなく断言したのだ。

何はともあれ、これが、一般大衆の、そして祖先伝来の言い草である。「言葉」観である。

その結晶である。

-----  
『現代国語論集成 柳田國男』庄司和晃・編集解説 1987 明治図書

